

記者走
記 想

2010いしかわ回顧

ネパール、インド、エチオピア、パナマ……。能登のアカマツ林に多彩なアクセントの英語が飛び交った。11月、国際協力機構が13カ国の環境問題の担当者を県内に招いた「里山研修」を取材した。

農村など日本の里山の営みを「自然との共生例」として、里山的環境を持つ途上国に伝える試みだ。10月の国連地球生きもの会議（生物多様性条約第10回締約国会議（COP10））で政府が立ち上げた「SATOYAMAイニシアチブ国際パートナーシップ」の、事実上の始動となる現場だった。

珠洲の保全林や輪島・金蔵の棚田を歩いた一行は、地域おこしに取り組む住民を質問攻めにした。林の手入れの費用対効果について議論を繰り広げたりした。「発展を遂げた日本は、里山の経済的バランスもいはず」。ネパールの研修員が語ったように、農村の貧困や乱開発による環境破壊に悩む彼らは、

発想転換「能登の時代」

経済大国・日本に「先進例」を見いだそうと懸念だった。

だが実際には、日本は過疎・過密や高齢化の「先進地」でもあり、能登の里山は危機にひんしている。

能登の耕作放棄地は10年で2割以上も増え、若者が戻らうにも、十分な収入を得られる仕事は少ない。「持続可能な社会」のモデルとして脚光を浴びる里山だが、足元から崩れかねない現実がある。

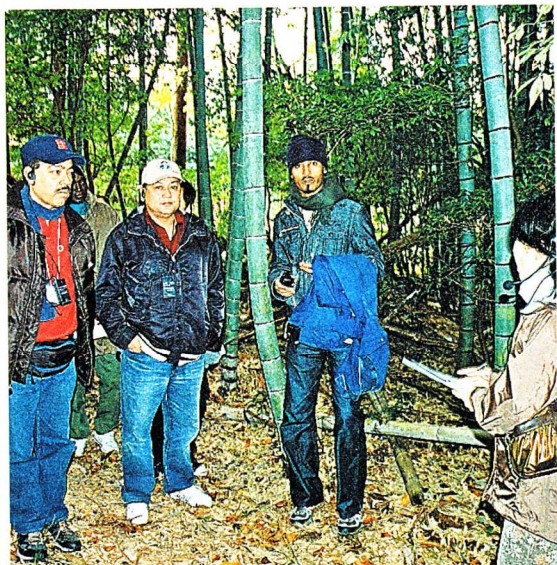
そんな閉塞感を打ち破る熱さを感じたのが、奥能登の農家の新たな取り組みだ。

11月と今月、金沢市のスーパーで農家有志が自ら店頭で米

を売る催しを開いた。小規模農家が多く流通面で限りがある奥能登ブランド米を広めようと、意欲ある農家が始めた「攻めの連携」だ。奥能登は水がきれいで寒暖の差が大きく、良質のコメが採れる。小さな一歩かもしれないが、発想の転換と創意で、遠隔地のハンディを長所に変える成功例となることだろう。

里山で踏ん張る能登の人々と、里山に可能性を見いだす途上国の人々の情熱が交じりあう時、効率優先の価値観とはひと味違う「もうひとつの世界」が能登から広まるかも……。まもなく転動で石川を離れるが、そんな想像を楽しみつつ、能登の時代への到来を待ちたい。

（矢代正昂）



里山を熱心に視察する各国の研修員ら＝11月、珠洲市内